

こころに残るエピソード



最初は緊張や不安が多かったが、利用者さんや先輩職員など優しく笑顔が多くあふれている職場で、自分自身も自然と笑顔になっていたことが心に残っている。



ご利用者やご家族からのありがとうという言葉やうなずき、嬉しそうな表情がとても心に残った。



最期の場面までご家族と共に過ごし、息を引き取る時に笑顔が見え、寂しい場面ではあったが、穏やかな表情をされていたことが心に残っている。



いつもお話をされず無表情な利用者さんが、私が口ずさんだ昔の歌と一緒に歌って、笑ってくれたことがうれしくて心に残っている。



ご利用者の最期を看取る看取りケア。その人らしさを考えながら穏やかに過ごせるようお手伝いをする。「良くしてもらった」などの言葉は心に残っている。



ご利用者や周りの方々と協力し合っ、ご利用者ができること、楽しめることを一緒に行えた時に充実感があります。



ご利用者、ご家族、職員からの「ありがとう」の一言はいつも心に残ります。



お手伝いなどをした際に、ご利用者の方からの「ありがとう」の一言が心に残ります。



ほんのちょっとしたことでも手を握り、涙を流しながらお礼を言われたことが心に残っています。



食事介助時にご利用者へ笑顔で話しかけたら「ああ、神様が来てくれた。ありがたい、ありがたい。」と拝まれた時はびっくりしましたが、笑顔の力ですごいなと思いました。それからは、「いつも笑顔で話しかける」を忘れずにいます。



入所された時は、自力で食事が摂れなかった方が、提供方法や声掛けを工夫することで、自力で食事が摂れるようになったこと。



ショートステイのご利用者で食事の時は常にむせるご利用者だった為、介助は気を付けるように指示されていたが、私が食事介助をした時は一度もむせることなく食事を残さず食べていただけた。自分にもできることがあると思ってとても嬉しかった。



食事介助の時、ご利用者のSさんはほとんどお話をされず、ただ口元に運ばれるままに食事をしていました。入所されている方々はかつては外に出て働いたり、家で楽しい時間を送っていらっやっったと思います。皆さんはどんな事に興味を持っているのでしょうか。そう思ってSさんに色々とお話を伺っていました。すると映画が大好きで会社帰りに週1で映画を見ていた事を教えてくれました。それからは、いつも映画の話しながらの食事TIMEでした。



関東大震災直前のお天気について、話していただいた女性のご利用者。いつもは風が吹いていたのに、その日に限っては無風状態だったと。ご利用者のお母様が「今日は何かがあるかも」とお話しされた直後に大地震が。歴史の生の声も聞くことができるこの仕事に出会えて良かった。



ご利用者が退所され、他の施設からやご自宅から「あなた達のおかげで元気になるました。ありがとう。」と手紙を送って下さった時はいつもやりがいを感じます。



ご利用者、ご家族の「ありがとう」という言葉はいつも心に残ります。



身体に癌があり、痛み止めの薬を使用してから解放されて笑顔になり、通常のトイレを使用中介助にて立ち会っている時に「あなたに頼みたくなるんだよ。どうしてかなあ。」と話されたことは心に残っています。



ちょっとしたこと。認知症のご利用者の方が、自分の名札を見て名前を呼んでくれた時にほっこりとうれしい気持ちになる。



職員の間助け合いの精神があり、「ありがとうございます。」の言葉がよく聞こえてくる。



職員が看取りケアの方に、仕事上がり「顔見て帰ろ。」と言って会いに行く姿に、愛があるなあ、と感じる。



他のサービスへ移行することになったご利用者の家族に最後の挨拶で来所された時に言われた言葉です。「私は色々初めてのことばかりで〇〇さんに相談にのってもらいとても助けられました。〇〇さん、これからはずっとこのお仕事を続けて下さい。大変かも知れませんが辞めたりしないで下さい。そして私が高齢者になり、お世話になる時は相談にのって下さい。」と言われた時はとてもうれしかったです。



様々な病気を抱えているご利用者とデイサービスで過ごしている時に、1つの話題で皆が意気投合し大声で笑って、その場にいる利用者も職員も笑顔になった時に幸せな気持ちになります。



バタバタと業務に追われている時に、トイレ介助に入って1対1の介助となった時にご利用者から「色々大変ね」と優しい声で声をかけてもらった時、ご利用者に気を使わせてしまったと反省すると同時に、「こちらこそありがとうございます」と感謝の気持ちを感じました。



ご利用者から初めて名前と呼ばれた時は、少しは信頼してもらえたかなとうれしく思いました。



末期ガンを患っていたご利用者 I さん。私がまだこの仕事に就いて間もない頃、I さんの手を洗面所で洗う介助をしていた時にポソッと「あんたの親切を私はあの世に行っても忘れないよ。ありがとう。」とかすれた声で言って下さいました。その時の切なさや驚きと嬉しさがこの仕事をそれから長く続けられた根のようになっています。



検事として大きな事件を担当しておられた時に、過労のためか脳内出血を起こし、右半身に大きな麻痺を残し、失語症状態になったTさん。10年間自宅でのみ過ごしておられたのがご家族の負担が大きくなったため、嫌々通所を開始されました。開始後しばらく誰も信用してもらえず、何をしても怒られてばかりだったのが、1年程過ぎたある日、排泄介助をしている私の頭を動く左手でそつとなでて下さいました。あれがTさんの「ありがとう」でした。



「あんたのことは一生忘れないよ。死んでも守ってあげるからな。」と新人の時に言われたご利用者からの言葉がすごく心に残っています。



救急対応したご利用者の家族から「あなたの判断のおかげで主人が助かりました。命の恩人です。本当にありがとう。」と言われた時この仕事をやっていた良かったと改めて思いました。



やはり「ありがとう」の言葉を頂いたときとても気持ちが高揚します。言葉を発せない方でも穏やかな目であったり、うなずきであったりと、その方の表情を読み取る力と、声掛けのトーンがとても大事だと思っています。そして騒がしくないけど、賑やかさがある職場でのお仕事をしていきたいです。



ご利用者に「あなたと会話している時が一番楽しいわ」と言われたことが心に残っています。



ご家族にいつも笑顔であいさつをして、日頃のご利用者の様子をお話ししているうちに信頼度が深まったと感じます。



ご利用者から「他の職員より、あなたが一番親切」と言われると活力になります。



ターミナルのご利用者の最期の場面で、ご家族とともに立ち会えて、息を引き取る時に笑顔を見ることができました。寂しい場面ですが、穏やかな表情をされ、介護をさせていげたことに感謝の気持ちが湧きました。



あるご利用者が突然食事を食べなくなり、自立の方でしたが、食べてもらわなければと思い介助をしたが拒否。「元気になりましょう。」「食べないと体に悪いですよ。」と声掛けしたが、ご本人から「いいんだよ、もう。」とぼつりと言。その数日後、私が夜勤の日にご家族と一緒に看取りました。とても安らかな最期でした。ご本人は最期が近いと感じていたかも知れません。私のご本人にとって良かれと介助していたのも、ご本人にとっては望んでなかったこと。利用者本位を考えさせられました。